06-12

難治舌痛症患者に対して、抗真菌薬および口腔乾燥改善薬を用いた治療成績

足利赤十字病院　口腔外科
○山根（やまね）　伸夫（のぶお）、丸山　亮、佐藤　祐介、瀧永　哲、
八木沢　就真、遠藤　裕香、東郷　真理亜

難治性舌痛症患者のうち同意を得た42例に対して、イトリゾール内用液および口腔乾燥改善薬を用いてその有効性について検討した。期間は2008.10～2009.7までの10か月の間、行った。 方法：42例にカンジダの有無（陽性28例、陰性14例）を検討するとともに、イトリゾール内用液20ml/dayを14日投与し、症状の推移を検討した。 次いで、薬効が不完全であった38例に口腔乾燥改善薬であるサラジェンまたはサリグレンを投与し、改善率の推移を検討した。それら症状の改善は5段階で評価した。 結果：イトリゾール内用液投与後の改善を4群に大別すると、真菌陽性かつ不変が4例（A群）、陽性かつ何がしかの改善が得られたもの24例（B群）、陰性かつ不変が6例（C群）、陰性かつ何がしかの改善が得られたもの8例（D群）であった。陰性でも8例に何がしかの改善が得られた一方、陽性例4例が不変であった。有効率は1点以上を有効とした場合76.2(33/42)％、2点以上を有効とした場合は52.4(22/42)％であった。 さらに改善不十分な38例に口腔乾燥改善薬の投与群を行った症例の改善推移を観察すると、A群とD群は不変であり、C群の3例とB群の5例に何がしかの改善が得られた。これらの有効率は1点以上を有効とした場合83.3（35/42）％、同様に2点以上を有効とした場合64.3（27/42）％に上昇した。 考察：難治性舌痛症にこれらの薬剤を用いることで、約7割の改善が得られた。D群の中には偽陰性の症例が存在した可能性があり、A群ではカンジダが存在してもその臨床的意義がなかった例と考える。さらに口腔乾燥改善薬の投与により唾液のflowが増えたことによる潤滑作用やカンジダの定着を阻止する作用が増強され、改善率の上積みが得られたものと考えた。

06-13

口蓋粘膜に生じた青色母斑の１例

深谷赤十字病院　歯科口腔外科[1)]、
千葉大学医学部附属病院　歯科・顎・口腔外科[2)]、
深谷赤十字病院　外科[3)]
○戸枝（とえだ）　百合子（ゆりこ）[1)]、山野　由紀男[1)]、中嶋　大[2)]、
肥後　盛洋[2)]、笠松　厚志[2)]、坂本　洋右[2)]、鵜澤　一弘[2)]、
丹沢　秀樹[2)]、伊藤　博[3)]

【諸言】青色母斑はメラニン色素産生能を有する紡錘形母斑細胞の増殖より構成される病変で，口腔内に発症するのは稀とされている．今回，口蓋粘膜に発生した青色母斑の１例を経験したので報告する．
【症例】患者は58歳男性，近医歯科にて左側口蓋粘膜に黒色斑があることを指摘され，精査加療目的にて当科を受診した．左側硬口蓋粘膜に6 × 4mm大の表面滑沢，境界明瞭な色素沈着を認めた．画像検査において内部の不透過像や骨吸収像は認められなかった．臨床所見により色素性母斑を疑い，全身麻酔下にて5mmの安全域を設定し骨膜を含めた切除術を施行した．切除後の露出した骨面には，ポリグリコール酸シートを貼付し創部を保護した．H-E染色所見として，粘膜下結合組織の中層に色素顆粒を有する紡錘形の細胞が増殖していた．また核分裂像や異型体などは認めず，青色母斑の診断となった．
【考察】青色母斑の本邦における口腔粘膜発生報告例は，我々が渉猟し得た限りでは自験例を含め13例であった．口腔内では口蓋に好発し，次いで上唇，歯肉にもみられる．好発年齢は10代以下の若年者に多く，性別では男性に多いとされる．口腔内発生例が黒色を呈することが多い理由として，皮膚表皮と比較して粘膜上皮は角化層の厚みが薄いことがあげられる．自験例でも視診では黒色を呈していたが，病理組織像から確定診断を得た．治療法は一般に切除術であるが，取り残しがない限り予後も良好とされている．悪性黒色腫の前駆症状として着色斑を示す場合もあり，色素性母斑を疑うような着色病変の病理組織学的検索を行う意義は大きいと考えられる．
【結語】今回，口蓋粘膜に発生した青色母斑の１例を経験したので文献的考察を加え報告した．

06-14

当院歯科口腔外科における10年間の悪性腫瘍の治療成績について

高山赤十字病院　歯科口腔外科[1)]、
岐阜大学大学院医学研究科　病態制御学講座　口腔病態学分野教室[2)]
○今井（いまい）　努（つとむ）[1)]、大久保　恒征[1)]、柴田　敏之[2)]

○今井　努　大久保　恒征１　柴田　敏之２　１高山赤十字病院　歯科口腔外科　２岐阜大学大学院医学研究科　病態制御学講座　口腔病態学分野教室　抄録　当院は岐阜県の北部1/3東京都と同じ広さの面積で　約人口16万人を医療圏とする地域の基幹病院であり平成17年厚生労働省より「がん診療連携拠点病院」平成20年２月８日に改めて「がん診療連携拠点病院」の指定を受けている。　当科においても　がん拠点病院にしてされる以前から地域における口腔がんに対し岐阜大学医学部口腔外科と共に治療をしているが、最近10年間の口腔がん患者の発症の傾向　治療の方法　及び治療成績について　統計的に検討したので報告する　当科入院の症例は10年間で51例　入院の延症例としては98例であった。平均在院日数は27.3日で最長は211日　最短は１日であった。51例中男性は26例　平均年齢は64.8歳　女性は25例　平均78.5歳で　男女比は差はなかった。当科での死亡例は10例で男性２例　女性８例で平均年齢は78.4歳であった。当院で手術した症例は39例　48件と76％　岐阜大学医学部口腔外科で手術した症例は７例であった。これらの症例について　当地域の患者傾向を分析し　文献的考察を加え報告したい。

06-15

当院におけるセツキシマブの使用経験と安全性の検討

足利赤十字病院　口腔外科
○丸山（まるやま）　亮（りょう）、東郷　真理亜、遠藤　裕香、八木沢　就真、
瀧永　哲、佐藤　祐介、山根　伸夫

セツキシマブ はヒト上皮細胞増殖因子受容体（ＥＧＦＲ）と特異的に結合するモノクロナール抗体で腫瘍細胞のＥＧＦＲを介したシグナル伝達経路を阻害することにより抗腫瘍効果を発揮する分子標的治療薬である。本邦では２０１２年１２月に頭頸部癌での適応が追加承認された。今回我々は、2013年２月より本剤による治療を開始し、８例の治療経験を得たので、その概要を報告する。
【方法】２０１３年２月より再発口腔癌および口腔癌の転移症例に対してセツキシマブ併用化学療法、または放射線治療を施行した８例を対象とした。内訳は再発４例、転移４例であった。そのうち、放射線併用が６例、化学療法併用が２例であった。放射線治療は多門照射66Gy、セツキシマブは初回４００mg/ｍ２（２時間投与）、その後２５０mg/ｍ２（１時間投与）を週１回で施行した。化学療法併用では、CDDP ７５mg/ｍ２× day1、５－FU ７５０mg/ｍ２× day1～４を基本とし、セツキシマブは放射線併用と同様に初回４００mg/ｍ2、その後250ｍｇ/ｍ２を週１回施行した。CDDP、５-FUの投与量は患者のPSにより適宜減量した。
【結果】CR ２例、SD ６例であった。Infusion　reactionはGrade1が１例、ざ瘡様皮疹はGrade ３が１例、Grade2が２例、皮膚乾燥は８例すべてに認めた。
【結論】治療効果は従来の殺細胞性の化学療法剤に比べるとやや劣るように思われるが、生命を脅かす副作用も少なく、外来通院での加療が可能で、全生存期間の延長が可能であるならば非常に有用な治療薬である。今後の症例報告の蓄積と新規治療方法の拡大を図りたい。